二〇一〇年十二月　山陰研究　第三号　抜刷
島根大学法文学部　山陰研究センター

翻刻『出雲小羅浮』

要木純一

【資料紹介】

翻刻『出雲小羅浮』

要木純一
（島根大学法文学部）

摘　要

『出雲小羅浮』（国会図書館蔵）は、明治初期、詩僧の天鱗（苔洲）、雨森精翁ら、松江の漢詩人たちが、梅花を詠んだ詩を編輯したものである。当時の出雲漢詩壇の状況を知る上で重要な資料であるので、ここに翻刻を試みた。

キーワード：出雲小羅浮　天鱗　梅　明治初期　漢詩

はじめに

天鱗（俗姓河野　号苔洲等　松江永泉寺の住職　一八〇七～一八九一）は、江戸後期から明治にかけて、出雲で活躍した詩僧である。漢学者として著名な雨森精翁と共に、その名声は全国的であった。ここに翻刻する『出雲小羅浮』は、恐らくは明治十四年（一八八一）に彼が詠んだ梅の詩に対して、雨森精翁をはじめとする詩友や詩弟子が次韻した作品を編輯したものである。「羅浮」とは、中国広東省にある羅浮山のことで、神仙伝説を伴った梅の名所として有名。それにあやかった標題である。翌明治十五年（一八八二）に出版。天鱗の作品は、彼の死後出版された『淡成舎遺稿一斑』にまとめられたが、この『出雲小羅浮』の詩は収められていない。また、彼のこの時期の作品と確定できるものも少ない。この書をはじめとする当時の（漢詩を主とした）文芸雑誌に掲載されることによって辛うじて残っている状態である。それぞれの詩に、評が付されている。主たる評者は、雨森精翁、雨森・天鱗の詩弟子といってよい平賀静遠、名古屋出身で各地を放浪したという漢学者・書画家寺西易堂、そして明治期来日した清人の文人として著名な葉松石である。これらの人々の関係がいかに結ばれたか、今後調査をしたい。なお、この書の編輯者兼発行人でいくつかの評も書いている犬山久右衛門は、雅号犬山凌濤という画家として活躍した人である。天鱗の詩に次韻した詩人達は、天鱗、雨森精翁の弟子筋に当たる。彼らは、当時の松江では相当の有名人であったようであるが、

その作品や伝記の多くは失われてしまった。この書の翻刻によって、明治初期の出雲漢詩壇の活動の一端を多くの方に知って頂ければと思う。そして、一つ一つの作品は、格調の高さをもち、奇抜な着想に満ちているので、ゆっくり味読する価値がある。

（天鱗、雨森精翁、犬山凌濤については『島根県大百科事典』（山陰中央新報社　一九八二）を、寺西易堂については『書道事典』（東京堂出版　一九七五）を参照されたい。葉松石（煒）については、永井荷風の「十九の秋」（岩波文庫『荷風随筆集』下所収）に言及がある。明治初期の漢詩文の評者としてしばしば登場。『煮薬漫抄』なる著があるが未見）

凡例

底本は、国会図書館蔵本を使用した。マイクロフィルム等便宜を図って下さった関係者各位に感謝申し上げる。国会図書館のホームページより本書の書誌情報を引く。

原本代替請求記号　YDM98548（マイクロフィッシュ）
タイトル　出雲小羅浮
責任表示　脩竹草堂主人編
出版地　松江
出版者　一年舎＝イチネンシャ
出版年　明15・12
形態　14丁；18㎝
装丁　和装
全国書誌番号　41013884
個人著者標目　脩竹草堂主人＝シュウチクソウドウ シュジン
NDC（6）　919
本文の言語コード　jpn：日本語
書誌ID　000000515963

一四丁とは、丁数が版心に打たれてある本文の部分であり、冒頭に絵、揮毫や序などさらに五丁が加わり（翻刻では「前一表」のように記した。本文には丁数を付さなかった）、奥付の丁が本文の後に付され、表・裏表紙がついている。

この翻刻では、内容情報を伝え、読みやすくすることに重きをおき、一行の字数、字の配置、大きさ、レイアウト等については、再現を志さなかった。たとえば、絵の落款等の部分は文字情報だけ示した。傍点は、評の内容にかかわるのでできるだけ原文通り振った。便利のために、作品の題の上に連番をアラビア数字で振った。漢字の表記は常用漢字体を基本としたが、一部、要木の趣味により、旧体字のままにしているところがある。【　】内に要木の説明や校訂を加えた。やがて原本を影印する予定。ぜひ参考にしてほしい。

翻刻

【表表紙表】
【表紙左に題箋・上中下段に分けて翻字】
【題箋・上段】
釈苔洲上人原韻
出雲　小羅浮【「出雲」横書。「小羅浮」大字】
諸詩客同和
【題箋・中段】

日本　雨森老雨先生
同　　寺西易堂先生
同　　平賀静遠先生　批評
清客　葉松石先生
【題箋・下段】
完【大字】
【表紙裏】【表紙裏・記載無し】
【前一表】【巨石の図】
小羅浮【巨石上に大字草書】
【前一裏・前二表】【見開き・揮毫】
未了工夫【落款・篆書】
絶似人有徳【大字】
　易堂鼎　鼎【落款・篆書】
【前二裏・前三表】【見開き・梅の図】
竹外一枝【梅の図右下】
　漱石　脩郷【落款・篆書。「脩卿」か？】
【前三裏】【印章】
修竹艸堂【大字・篆書】
【前四表】苔洲道人嘗観梅於近郊。得五絶句。一時伝播属而和者数十人。積為一冊。頃其詩弟子欲鋟以公之。来謁評余。々雖老乎。紙帳永夜。未免作羅浮之夢。且篝燈読之。覚気勃勃自巻中出。元稹文章映日可見者。非乎。乃妄意挙所記古人咏梅諸語評之曰。道人之詩。清淡雅遠。其以韵勝処。竹外一枝足以当之。而諸子之作。【前四裏】亦各有所長。玉環飛燕。自不失天容。至其高標圧万花。則江上千樹無一不同。蓋道人詩教之所及人所餐皆玉。宜矣桃非伍而杏未真也。余昧於詩。不如而言之。迎風一笑忘顔厚也。焉乎得起如放翁者定其品。詩弟子誰。脩竹草堂主人也。作評者誰。晴耕雨読逸民也。【「不知而言之」は当に「不知而言之」に作るべし】
【前五表】【標題・周囲に飾り有り】
出雲小羅浮【大字】
【前五裏】【編者凡例】
一此書上梓原非為不朽者其意惟在寄遐邇同社而已
一諸什随得随誌非以優劣為之順次諸家批評亦非出一時故如巻末総評亦有不可概以全篇者
一作者及評者始詳其姓号嗣後唯挙号以従簡便
　明治十四年辛巳冬日　編者謹誌
【本文】
小羅浮
　　修竹草堂主人編輯
1福富観梅五首之一　　松江　苔洲道人　河野氏

吟遊旧記一林梅。節候乗レ晴得得来。恰是看レ花無レ憾処。南枝未レ謝北枝開。【憾にもと傍点無し。今補う】

雨森老雨曰。詩亦無レ憾。

編者曰。一花両花南枝北枝之流亜。

2右次韻　平田　老雨居士　雨森氏

三五人家傍二野梅一。不レ知何歳卜レ隣来。羨渠飽領二看レ花福一。看自二微開一至二満開一。

寺西易堂曰。極清高。又極渾成。蓋此自二実景一来。故能有二風趣一。

真七絶最上乗。

3同　松江　平賀静遠

半日偸レ閑訪二野梅一。煙兄霞弟伴相来。千林一様看方好。爛熳恰如二嫉レ我開一。

老雨曰。喜可レ知。

編者曰。梅花果有二知己一。

4同　静岡　中村蓼坪

城東村落小林梅。破帽残衫冒レ暁来。老樹着レ苔瘦成レ趣。一罎薄酒対レ花開。

平賀静遠曰。城東村落。作二淞湖南畔一如何。

老雨曰。詩亦有レ趣。

5同　松江　永井榴窓

野水橋頭幾樹梅。一番芳信悩レ人来。只憐疎影横斜処。何問半開与二満開一。

老雨曰。清而淡。

6同　松江　鈴江鱸汀

常愛氷魂老瘦梅。忍レ寒遠訪二野村一来。寄レ言多少看レ花客。清賞由来在二半開一。

老雨曰。半開之妙。人多不レ解。

静遠曰。淡淡著レ筆。却有レ味。

7同　松江　槇説山

偶訪二湖南一塢梅一。香雲白処認レ春来。東風応レ触二微和気一。万朶無二花不二盛開一。

静遠曰。一気呵成。可レ謂二佳作一。

編者曰。三四餘韵裊裊。

8同　松江　三嶋雲滙

断橋流水古村梅。也趂二香風一着レ屐来。最是仙姿奇絶処。一枝竹外冒レ寒開。

易堂曰。竹外一枝。梅之本色。世人徒誇称二其多一何乎。詩亦不レ在レ多。唯清峭簡短可二以配一レ梅。

老梅曰。結句有レ味。

○

9其二　苔洲道人

班レ荊煖レ酒借二林坰一。占二得梅花一満意馨。冷艶照レ人人欲レ眩。全開如レ雪半開星。

易堂曰。梅風神。一句悉レ之。

老雨曰。如レ画。

10右次韻　老雨居士

風意恵然来度レ坰。梅花応三放二一枝馨一。衰躯唯待二春消息一。不レ省鬢毛添二幾星一。

易堂曰。似二放翁一。

静遠曰。漸近二自然一。

11同　静遠

綽約梅花擁二野坰一。吹レ衣習習午風馨。清遊如レ此知難レ又。世上塵雰無二半星一。

老雨曰。星字妙。

易堂曰。又作レ復如何。

12同　長門　山下楓庵

多謝梅花満二野坰一。渓流処処送二清馨一。紅暾烘レ雪門猶鎖。不レ似吟人戴二暁星一。

老雨曰。為二梅花一戴レ星。可レ謂二知己一。

編者曰。流暢。

13同　松江　松田淞雨

一簇寒梅雪満レ坰。清氛撲レ面午風馨。却憐老樹多二奇韵一。万蕾綴レ枝如二乱星一。

老雨曰。老樹多二奇韵一。自無二老人支離頽唐之態一。吾輩衰躯。恥二梅花一多矣。

静遠曰。意之所レ至筆亦随而至。真麻姑掻レ痒之手。

14同　蓼坪

試開二吟席一憩二高坰一。一簇香雲襲レ面馨。風致渾帰二枯瘦樹一。不レ知経過幾霜星。

老雨曰。風致帰二枯瘦一。知レ梅者言。

15同　周防　清水三板

尋二遍春魂一在二野坰一。粉痕狼藉染レ衣馨。痴心未レ覚揚州夢。謾把二梅花一擬二小星一。

老雨曰。孰能為二之大一。

静遠曰。小杜之流亜。

16同　松江　天野瓦全

圧二凌群卉一簇二林坰一。向背花開争吐レ馨。密処似レ雲疎処雪。煇煌射レ眼乱二瞳星一。

易堂曰。梅花繁密処有二此景況一若二月瀬一是。

老雨曰。也好。

17同　松江　木村梅窓

芳陰択レ地在二東坰一。乍覚衣襟分外馨。最好岩隈留レ雪処。南枝占レ煖爛如レ星。

老雨曰。占レ煖作レ回レ煖何如。
編者曰。奇境奇作。

18同　松江　瀧川蜻洲
微吟連レ屐歩二林坰一。到処梅花迎レ客馨。況有三鶯声助二幽興一。莫レ辞留賞戴二春星一。
静遠曰。其興可レ想。

19同　説山
断橋流水小林坰。来趂一番風意馨。的皪梅花籠二暮靄一。恍疑空際聚二春星一。
老雨曰。如レ見。
静遠曰。温其如玉。

20同　雲滙
春蟾無レ魄照二林坰一。満目梅花雪帯レ馨。忽地呼レ奇人拍レ手。風葩一片似二流星一。
易堂曰。巧緻似二誠斎一。彼亦見レ此当二把レ臂訂レ交。
老雨曰。一二韵。

○

21其三　苔洲道人
野梅林下坐忘レ帰。好使二香風剰襲レ衣。可レ笑老農無二雅思一。怯レ寒牢鎖対レ花扉。
老雨曰。牢鎖二字。妙。
静遠曰。意想高妙。匪二夷所レ思。

22右次韻　老雨居士
欲レ画二梅花一晩未レ帰。花香和レ墨自薫レ衣。多情最在三黄昏月一。代写二仙姿一上二版扉一。
易堂曰。下レ筆周到。
静遠曰。黄絹幼婦。

23同　三板
瓢酒酬レ春晩未レ帰。寒香和レ月満二吟衣一。全郷淡被二梅花鎖一。孰是孤山処士扉。
静遠曰。全郷改作二一村一則如何。
編者曰。梁翁所レ謂。梅花亦自有二仙源一。是。

24同　松江　高橋春流
醺然一酔未レ言レ帰。不レ覚風威来襲レ衣。花下坐開吟客席。路傍深鎖野人扉。
老雨曰。野人之野。可レ笑。
静遠曰。三四有レ趣。

25同　榴窓
観レ梅吟罷晩将レ帰。疎影横レ渓香着レ衣。莫三是花神留二韵客一。一枝擎レ月上二林扉一。
老雨曰。詩亦有レ韵。

編者曰。望外之喜。状態可レ想。

26同　梅窓

花下清遊誰得レ帰。冷香浮動襲二人衣一。村翁不レ解観レ梅楽。却怯二春寒一掩二小扉一。

老雨曰。却字有レ力。

編者曰。古情新趣。作者弄レ筆処。

27同　瓦全

春風影裏豈思レ帰。勒二住清氛一飽満レ衣。安得三推レ君為二我主一。借二将隣地一卜二荊扉一。

易堂曰。梅花忠臣。

編者曰。此士蓋飲レ水読二仙書一之流者乎。

28同　説山

看二了梅花一乗レ夜帰。門前到処月侵レ衣。竚聞稚女報二家媼一。剥啄有レ声誰叩レ扉。

葉松石曰。饒有二宋人神韵一。

老雨曰。必欲レ識二花真意一者。一呵。

29同　雲滙

看到二黄昏一帯レ月帰。寒香和レ雪撲二吟衣一。不レ知村老何風趣。夜対二梅花一独啓レ扉。

老雨曰。翻案妙。

易堂曰。与二苔洲可レ笑老農云々一反対。人情不レ同大都如レ此。

○

30其四　苔洲道人

闘レ酒吟レ花暮景催。出レ林呼レ杖首頻回。豫思今夜幽窓夢。定過二潺湲略彴来一。

老雨曰。風韵。

編者曰。三四奇想。

31右次韻　老雨居士

曦車運レ老苦相催。白首看レ梅能幾回。澹月疎星村墅夕。也携二吟友一帯レ瓢来。

易堂曰。有レ情有レ景出以二軽穏句一。非二老手一不レ能。又曰。吟友帯レ瓢四字最精妙。不レ知者以為二平凡一。是未レ嘗二詩中甘苦一者。

静遠曰。愛レ梅情摯。

32同　静遠

間吟細酌興頻催。黎杖可二応待レ月回一。向レ晩梅花増二冷艶一。蒼然暝色覆レ林来。【黎・藜、暝・瞑は通用】

老雨曰。三句有レ神。

易堂曰。暝色来増二冷艶一。梅花之絶勝。平平言出。却有二風致一。

33同　淞雨

詩情更被二早鶯催一。把レ筆酒間吟一回。醉向二梅花一戯相問。風流如レ我幾人来。

老雨曰。梅如解レ語。応レ称二以知己一。【当に「応三称以二知己一」に作るべし】

静遠曰。不レ知。梅花作二何等答一。

34同　三板

先生亦被二暗香催一。林下探レ春歩幾回。最喜黄昏月添レ影。匹如朋自二遠方一来。

老雨曰。使二用経語一妙。

35同　説山

観レ梅好被二小暄催一。試作二春遊第一回。莫二是花時別天地一。身投二香世界中一来。

老雨曰。余遊二月瀬一有二一聯一。不レ遊二香世界一。誰信二玉乾坤一。亦同意也。

36同　雲滙

吟遊動被二野梅催一。十日寒陰過幾回。枝北枝南花次第。春風着レ脚自レ何来。

易堂曰。淡泊有レ味。言尽而情不レ尽。可レ称二七絶上乗一。

老雨曰。着レ脚。妙。

○

37其五　苔洲道人

観レ梅把レ酒以レ詩群。半日清遊興十分。花気着レ衣揮不レ去。到レ家猶覚有二餘薫一。

老雨曰。以詩群。妙。

編者曰。流麗間雅。鮮レ於二錦繡一。

38右次韻　老雨居士

皜皜唯疑鶴作レ群。連レ天弥望有レ誰分。初知它是非二群鶴一。一線寒香渉レ水薫。

易堂曰。起想出二意表一。

静遠曰。南宋人声口。

39同　静遠

暮煙籠レ樹宿禽群。流水小橋野径分。帰去山妻当レ怪レ我。衣襟猶未レ散二餘薫一。

易堂曰。奇想。亦好レ笑。

老雨曰。不レ知内子作二何等語一。

40同　淞雨

班レ荊把レ盞此同群。春到二南枝一已幾分。戯撚二瓊葩一和レ酒飲。新詩唱出口生レ薫。【「已」はもと「己」に作る。今改む】

静遠曰。三四細膩可レ喜。

編者曰。清言如レ蘭。宜矣口亦生レ薫。

41同　春流

晩歩相携吟客群。帰来間臥到二宵分一。衣衫留二着梅花気一。鼾鼾声中夢亦薫。

老雨曰。筆亦生レ香。
静遠曰。所レ謂無レ可無二不可一者有。

42同　榴窓

杏桃粗俗豈同レ群。世外風姿春幾分。更有三月来添二雅致一。横斜影裏暗香薫。

老雨曰。雅致如レ見。
編者曰。天然佳趣。似二不レ経レ意者一。

43同　瓦全

孤清独韵冠二花群一。吟骨為レ君瘦幾分。看到二黄昏一殊有レ趣。白糢糊処月痕薫。

易堂曰。雖二孤清独韵一得レ月増二風神一。又曰。転句最有レ力。
老雨曰。詩亦殊有レ趣。

44同　雲滙

観レ梅坐久伴二仙群一。寒月峭風過二夜分一。野鶴亦憐二清絶一否。白糢糊裡一声薫。

老雨曰。余遊二月瀬一有レ詩曰。栖鶴有レ声不レ知レ処。月香風白万梅村。
意略同。
静遠曰。三四清麗可レ愛。

梅花詩。前賢名作如レ林。後学本難二出色一。故此等題善蔵レ拙者。未二肯軽易下レ筆。今読二大作一。畳二次原韻一。至二三十八首之多一。雖レ未二尽善一。却亦頗多二佳句一。是曾用三功于二詩学一者。非三尋常学レ詩者所二能企及一也。倘肯節刪。以レ少勝レ多尤妙。
光緒辛巳年新春　浙西葉松石妄評

尊稿。似二宋詩一者居レ多。雖レ乏二深遠之趣一。亦有二意到筆従之妙一。其清才奇想。我輩百思不レ能レ出也。敬服敬服。
辛巳十一月閲於松江客館　浪華易堂西鼎妄批評

巻中諸篇。不レ假二摹擬一。直写二其胸臆一。天真爛熳。毫無二尖巧軽薄之弊一。敬服敬服。
辛巳仲冬　松江静遠平賀順僭評

【奥付】

定価十銭

[松江第三活版所印刷]

明治十五年十二月　廿六日出版届
同号同年同月　刻成
編輯兼出版人
出雲国意宇郡灘町
犬山久右衛門
発兌所
同国同郡松江天神町
一年舎
弘通所

出雲松江　園山喜三右ヱ門　石見大田　松井永作
同　川岡清助　同濱田　安達幾太郎
同　稲吉吉蔵　伯耆米子　今井兼文
同　有田伝助　同　村上斎二郎
同平田　西尾佐助

【奥付丁裏記載無し】

【裏表紙】

本翻刻は、
・二〇一〇―二〇一二年度　山陰地域文学・歴史関係資料の研究
代表者　要木純一
による成果の一部である。

“Izumo syo Rafu”：reprint and intoroduction

Junichi Yogi
（Faculty of Law and Literature,Shimane University）

〔Abstract〕

“Izumo syo Rafu “owned by National Diet Library was published in 1882 in Matsue city. On this book we can see Kanshi poems about plum（ume）blossoms.They were made by famous poets who lived in Izumo district in early Meiji era. This is reprinting the book.

Keywords：Izumo syo Rafu　Tenrin　plum（ume）　early Meiji Era　Kanshi poem